

都市の隙間

コミュニケーションを活性化する廃校校舎

21119003

石塚 真菜

指導者

宮 晶子准教授

都市
壁

隙間
居場所

コミュニケーション
地域複合施設

研究の背景と目的

都市に隙間をつくることを考える。用途に埋め尽くされた街の中で自分の居場所が見つからないという感覚を味わったことはないだろうか。ドイツ出身の哲学者であるハンナ・アレントは、著書「人間の条件」のなかで公的領域の喪失について「テーブルの周りに集まった多くの人々が突然テーブルが真ん中から消えるのを見る。そうすると、互いに向き合って座っているふたりの人はもはや何か触知できるものによって分離されていないだけでなく、互いに完全に無関係となる」と表現している。この言葉は私が感じている冒頭感覚をうまく言い表していると考えられる。機能に満たされた街の中で身近な場所にいる人たちと無関係になっている現在において、街の中に存在する機能のどれにも属さない、人と人とのコミュニケーションを生む様々な使い道を許すことの出来る空間が存在するとき私はそれを『隙間』と呼ぶこととする。この定義に基づき、都市の中に隙間をつくる為の建築手法について考察する。

隙間をつくる空間構成手法

様々な使い道を許す空間の構成を目的とする。実体験からの考察により、空間構成の上で「囲まれ」に着目して設計を行う。

1 「囲まれ」の定義

ここでは前後左右に壁が存在する空間のことを「囲まれ空間」として定義する。

2 実体験に基づく考察

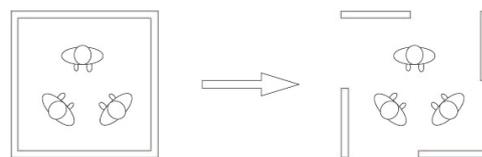
四方を壁に囲まれた空間の中にいるとき、人はそこを自分のテリトリーであると感じ、自由な振る舞いを見せる。それが街中や、公園の遊具の中であっても。しかしこの空間が個人のテリトリーのままで終わってしまっただけではコミュニケーションを誘発する場として機能することは出来ない。ここに自分で選択して囲まれ空間を選び取るという行為が重なったときどうだろうか。そこには、より自由な使い方を許す空間が広がる可能性があると考えられる。

3 囲まれ空間に選択性を加える操作

規則的に広がる、囲まれ空間の群れに「囲まれ感」と「大きさ」を変える行為を加えることにより、決まった枠を取り払い、自分で選択することを可能にする。これにより、使い方の可能性は無限に広がり、時と場合に合わせて使い方を限定しないことが可能になる。選べるという行為が他人にとって寛大になるきっかけとなり、結果的にコミュニケーションを生むのではないか。

4 囲まれ感を変える (図1)

人は空間の角、隅に身を寄せがちである。角を残しながら空間を解放することにより、人は身を寄せながらも空間を自由に使い始める。これにより、囲まれ空間はコミュニケーションを誘発する空間となる。



(図1) 空間を解放することによる平面の変化

5 大きさを変える (表1)

エドワード・ホール著書「かくれた次元」より表1の寸法を利用し、身体距離のもつ効果を応用することにより、囲まれ空間の大小の操作を行う。

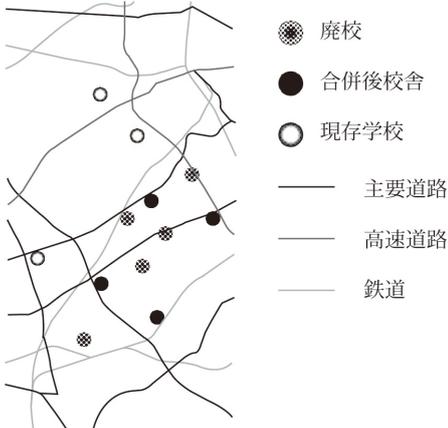
密接距離	0.15-0.46m	隣にいる相手の存在をはっきりと感じる距離。
個体距離 近接層	0.46-0.76m	親しい者同士が公的場においてとる距離。
個体距離 遠方層	0.76-1.2m	個人的な関心や関係を話し合う距離。
社会距離 近接層	1.2-2.1m	個人的ではない用件を行う距離。
社会距離 遠方層	2.1-3.6m	人を互いに隔離し遮蔽する距離。
公衆距離 近接層	3.6-7.6m	隣にいる相手の存在が気にならない距離。
公衆距離 遠方層	7.6m 以上	顔の細かい表情が感じ取れない距離。

(表1) 対人距離

(出展) エドワード・ホール著書「かくれた次元」 みすず書房出版 1970年

都市の中の隙間となる場所 (図2)

現在、東京都目黒区では区立中学校の生徒数の減少による学校の小規模化の進行を背景に、めぐろ学校教育プランに基づいた区立中学校の規模調整を行っている。それに伴い、12校存在した区立中学校は約半数の7校程度になる予定である。現在既に廃校となった二校については学校の外観をそのままに区の施設として使用されているが、生徒が集う機能を失ったその校舎は、地域に閉鎖的である。かつてこの場を中心に形成されたコミュニティがあり、人々の生活の一部として機能していたこの場所を、建築的操作によって新たなコミュニケーション形成の場として利用出来るのではないかと考える。今回は現在すでに廃校となり、めぐろ学校サポートセンター兼ねぐろ歴史資料館として利用されている元目黒区立第二中学校に注目して設計を行う。人々の体に慣れ親しんだ学校のスケールを持つ躯体はそのままに、閉鎖的に外部と内部とを隔てる壁を操作することにより、この場所が地域に開いた場として機能することを目的とする。



(図2) 目黒区統廃合地図

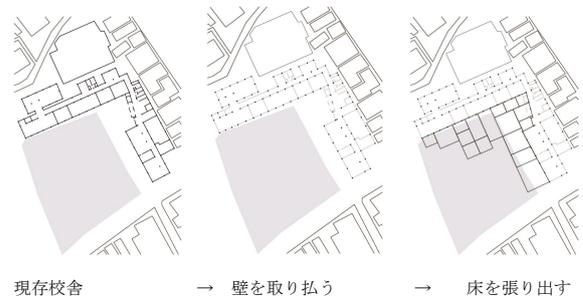
プログラム

幼少期において私にとって街の中での居場所であり、ここでいう「隙間」は近所の公園であった。しかし、年を重ねて公園で遊ぶことのない年齢になった今、テーブルとして機能するものを見失っているように感じている。公園で遊ぶ子供達には「遊びという共通の興味」と「公園という共通の場所」があった。そこで、私は「共通の興味と場所」が人と人との交流のきっかけを生む為に必要な要素であると考え、興味がわかりやすく現れる場所にコミュニケーションが生まれると考え、この建築には様々なプログラムを含む複合地域施設を提案する。利用者として想定する周辺地域に住む子供から学生、働き盛りの単身者、新婚夫婦、子育て中の大人やお年寄りまで様々な世代の人が朝昼夜問わず使用出来、この建築に明かりを灯す場を想定する。

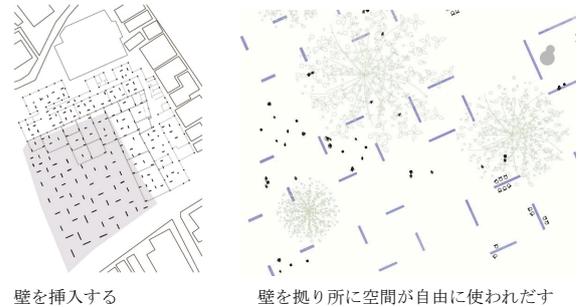
設計・提案

現存する校舎を地域に開き、更に、現在の校庭部分から校舎内にかけて「囲まれ空間」を設計することにより学校全体が都市の中の隙間として機能し始める。

1 校舎を開く

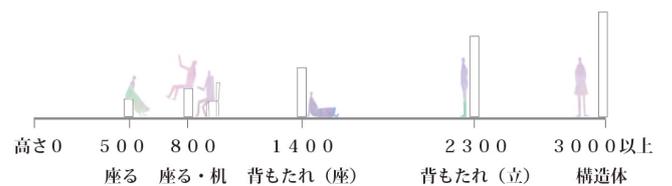


2 居場所をつくる壁を挿入する

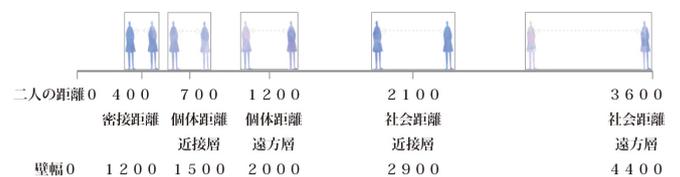


3 壁の役割 (図3、4)

挿入される壁は寸法により様々な居場所をつくり出し、さらに構造体としても機能する。



(図3) 高さ方向のコントロールパターンとその役割



(図4) 壁幅のコントロールパターン

参考文献

エドワード・ホール著書「かくれた次元」みすず書房出版/1970年
 今村雅樹/高橋晶子/小泉雅生著者「パブリック空間の本」靖国社出版/2013年
 目黒区 HP <http://http://www.city.meguro.tokyo.jp> 2008年